二〇二五年二月二八日

陵線の膨らむと見ゆ春の山　せつ子
春の雨模糊と島影滲みけり　わかば
宝蓋草荒地に浄土なせりけり　む　べ

二〇二五年二月二七日

古御籤残りし枝の芽吹きけり　そうけい
啓蟄の園新調の遊具かな　やよい
たたら踏むこんなところに花菫　澄　子
白雲を纏ひしごとく梅の丘　あひる
捨て畑の老いたる桑の芽吹きけり　愛　正

二〇二五年二月二六日

下萌えて斑模様の河原かな　わかば
杖人にあはせて巡る梅の苑　せつ子
逃げ足のいよいよ早し二月尽　董　雨
久闊を叙しつ頬張る桜餅　澄　子
水草生ふ流れの色の深まりぬ　わかば
大嚏して一日の始まりぬ　うつぎ

二〇二五年二月二五日

頂きを雲居に置けり雪の富士　む　べ
田の神さあに一献参らせ耕運機　よし女
相聞のごと春禽の鳴き交はす　せいじ
窓越しの氷柱に透ける青き空　ほたる
マンバンヘアきりり若者春耕す　あひる
春風に潮の香通ふ蜑の路地　わかば

二〇二五年二月二四日

満ち寄せる波白々と余寒あり　よし女

二〇二五年二月二三日

伸び縮み繰り返しては鳥帰る　みきお
春泥にまみれる子らに未来あり　うつぎ
暖かく子らに声掛け見守り隊　たか子
のぼり来る風香しき梅の丘　康　子

二〇二五年二月二二日

出張の父に似せたる雪だるま　せいじ
海の綺羅さして耀く白子干し　明日香
五百年湧くお茶の井や水草生ふ　もとこ
厨夫吾の春風邪に戸惑ひつ　ぽんこ
一山家布団のごとく雪被る　ほたる